新編水滸畫傳 七編 壹

875
61

唐本百回本翻譯

高井蘭山翁編譯
葛飾北齋主人畫

新編水滸畫傳 七編 全十冊

浪華書林 岡田羣玉堂製本

門へ遠21 特
類 875
巻 61

新譯水滸畫傳七編總目録

前帙五卷第七拾五回より第八拾一回まで

明治三十年十月十日購求

巻之六拾壹
活閻羅船を倒して御酒を偸む
黒旋風詔を拉て欽差を罵
呉加亮四斗五方の籏を布

巻之六拾貳
宋公明九宮八卦の陣を排
梁山泊十面の埋伏

巻之六拾三
宋公明再童貫に贏
十節度使議して梁山泊を取んと

宋公明一高太尉を敗
劉唐火を放て戦船を焼

巻之六拾四

宋公明両高太尉を敗
張順鑿て海鰍船を漏しむ
宋公明三高太尉を敗

巻之六拾五

燕青月夜道君に遇
戴宗計を定て蕭讓を賺

後帙五巻第八十二回より第八十八回の始に至る

巻之六拾六

梁山泊に金を分ち大に貫市に
宋公明駙を金ふして招安を受
宋公明詔を奉ち大遼を破る

巻之六拾七

陳橋驛に涙を滴ち小卒を形
宋公明の兵獲及城を歩

巻之六拾八

盧俊義大に玉田縣に戰ふ
宋公明夜益津関を度
呉学究智をもつて文安縣をとる

巻之六拾九
宋公明大ゐ獨鹿山ゐ戰ふ
盧俊義ゲ兵青石路ゐ陷

巻之七拾
宋公明大ゐ巡列ゐ戰ふ
呼延灼カ番將を擒あゝ
顔統軍陳ゐ混天の象を列

新譯水滸畫傳七編總目録 畢

新編水滸畫傳巻之六拾壹

東武 高井蘭山翁 譯編

○活閻羅私を倒まして郡衙を偷

柴大尉陳家谷ハ梁山泊へ勅使の命を奉り。私鈔ゐ聞う張の和
云ゑとなゝ〜名を知よ。同僚の友人多く来り。酒菓を以て饗し且
賞しく云ゝ。我を尉梁山泊へ使しうゑ。緣ゐ大役と云つべし。一ツ
ゐハ国家の為ゐ大事を幹。二ツゐハ民百姓の為ゐ憂を除きうゑ
となんゞ。彼地ゐ至りうゑ。雄を捜しうゑ。宋江ゐを誘しうゑ。
彼等も皆く忠義を出もうとする人なんゞ必ず胡廷ゐ帰順て忠勤を
致すべく。吾尉も又大功を立るべしと。從者ゐ云ゝ。門前より
紫閣の彼方へ大咋尉より幹人来りゐ。主人慕ゐ来ゐ

吉尉が従姪と紀子細をば唯今ぞ聞くべしと宣ふ吉尉兼て聞て明友とおもひ辞し。速即轎を乗せ曹門の桑吉郎が館へ急ぎ行き。こゝに桑府に入りしかば孫吉尉轎より下り。案内とかうして桑府幹出来り。節堂の奥深き座敷へ請じ入れ。桑吉郎を待なく出来り。こゝに温和の挨拶終れば。桑吉郎が云ひけるは。夫よりこれを下とおいて梁山泊へ走り。宋江が兄弟と胡延へ告知らせと云ふる。そもそも何に特く足下を招き。従姪紀子細と云い終の義まあらば。彼宋江が兄人いかに某山泊の書状なれば。彼胡延へ伝ひ聞すべきを固じらするやうに。汝彼地に来りて必ずしも恐れを抱く。胡延の従紀。吉家の従姪と夫人べきなれば。編伝ふるべきや行已有恥使四方不辱君命とあれば必ど無暑ふまべきなれば。我が

府裡の幹人い。祇美幸に通達し胡延の従姪も能知る人あれば。
お伴るべし。彼の知ざるとこそ。吉紀を従えべし。孫氏吉尉かしこ
まりて。あゝ已と然来し。吉郎を辞し。彼幹人を従幹辞と呼び我
彼に向ふ。急ぎ酒者と具へ。張幹辞を客座に通り知ふ門前に車
るの吉宣く。る厨郎の出入と告られば孫吉尉慌忙と起ち出来
り。然しく。る厨郎と上座に位置互ふ。温を速待る。吉尉が云ひ我
胡延より宋江と教し。招安とるの義。今あて後悔せり。宋
る時胡延に左合せあば。義に非ず。止むべし。いかとられば。宋江
我し胡延と厚しめ。る恩義に対へ。宋江を教し。て。宋江
ふ引入なば。清東大ひなる憂となるも料りがたし。義と止んと
欲すれ。吉郎の云ふ再び回るべきなば。我宋江が兄弟を連れて

おしふても胃凄あくべ。你ふくとと止て居べし。宋江速天子ふ奏し
大軍をもて幸〳〵。元紙を卸〳〵ニ〳〵なく後の患と拂人べし。
苟く根を除くの外なべ〳〵。元紙択ひふいん且又比殺を尉一人して
いの大殺と存ろ。我家臣ふ事虞侯ふ奔明者ふ〳〵ふ類何の
矢石なれば。ふ〳〵の助けともなべ〳〵。石逢らい〳〵ふべ〳〵とて事虞候
を止毫。そ多い時を尉ふ和辞〳〵と居うる。去ども孫を尉ふ堂弟ふ
もなりとべ。彩抱を黙へ生ん十瓶の英酒の紙ふ
て新風の傍とな〳〵。上ふ一面の黄色の雑と立間〳〵白ふ和ふく
背ふ紹ふと脊負。蔡大帥ふの付人張幹辰。ふ服帥ふの付人李
虞候とも者ふ〳〵ふ諸〳〵ふ和ふ部後数人ふ曹門を出て
発ふ。大小の皮人ふ者ふ選べ。ふ〳〵ふ孫を尉ふ数日とて。孫を尉ふ

ふ〳〵ふ。ふ〳〵ふ張叔夜ふ者ふ〳〵ふ後役ふ〳〵ふ。自〳〵迎へ府中ふ後
ふ〳〵ふ。ふ〳〵歓待招安の一事を問ふ。ふ〳〵ふ孫を尉遂一ふ言ふる処。張叔夜ふ云。
宋侯ふ業を迎ふ。ふ〳〵ふ度の招安ふ徽ふ朝廷の吉兆ふ〳〵ふ。彼宋
江の勢下ふ性賀頭次のど兄人多ふ〳〵ふ。ふ云ふ白〳〵ふ。彼〳〵ふ衝撞の
辞あれば。却〳〵大半を壊ふ〳〵。若〳〵ふ和〳〵ふ。ふの為なれば必
ど甜言ふ使を以〳〵。策を接恤ふ〳〵。彼必ど怒〳〵ふ江山永〳〵ふ平ふ
ん。性好も反もふ〳〵料ふ〳〵べ〳〵。と〳〵ふ孫を尉ふ侍ふ和ふ張幹辰
李虞候同者ふ〳〵ふ。我ら二人ふ比殺主人の命を承ふ。ふ尉ふ従て梁
山泊へ来ふ者あれば。絨人ととひ鬼神のどと者なふ。我ら宋家の威
勢を以〳〵。一問一答ふ〳〵伏すべ〳〵。却〳〵小心和睦を以〳〵彼を接恤べ絨
の勢ひと恐ふ〳〵ふ。偽者ふ人ふ中ふ。張叔夜ふ立て孫を尉ふ

向ひ。此あ人いを尉うへいの家来ふいやと問ふれば孫を尉が云一人い若き者
作が因幹人一人いる太尉が虞候と云へ々る。張叔夜が云孫ぐび二位
いい此処より西へ五ひて強ぐべ〜。百連られんるれ。却く男して切る性
と探る而ま〜ヤ々れば孫を尉うそして言々る。彼あ人い蔡府尹る府人腹の
人をいこ。あ二人と云亟系一人梁山泊へまぐび。円銀もるべ〜と言々る。
張叔夜再三止められ。史よ洋客の薛もなう々る。張幹辯侍より言る
変ふ云我ら為人を尉ふ伴ひて系まるうれ。おも失脱いあるまで！と存るく
と立腹しぐどうへよう。張叔夜い車の威べ〜ざるを察して孫ば孫ば
人の内ふ業を作言敵作などぐ好侯疑。実ふ帝へ知義と思ぐ。
言多の恩なるもん角ぐ。唯権威ふつのるとのを知りて。あ人の附人張
もを人の恩味ふ加うるうると因人ふ欲長〜。一云も即ふ出ぐ先英

酒佳肴とい〜孫を尉及び兄人を銀待已ふ延序も終り々れば孫を尉
い張叔夜ふ辞別〜。兄人と呂連流兄の駅鈴ふ宿〜。三望日わもなり
しぐ。流兄の為るより使ど云ぐ此教と梁山泊へ中毛〜々う。梁山泊ふ来江
洋多の恩礼を忠義堂の内ふ褒め宴の大牛と高議して生々る。細作人来
て流兄より使来れりと告れば歩ぐ出ぐ迎ひとなり〜ふ々る
処ふ小嘍囉一人流兄より紹々ら役人と忠義堂へつれ来り〜云此殺朔延より
を尉孫ふ若と言〜。十瓶の御酒并罪を赦しの丹紙を持て江ふ流兄城ふ出
りれば早く迎接の用云ゑ〜とヤ々る。宋江史て大ふ喜び逐ふ酒合を設て流兄
の使どり〜。蔡京として花紙十枚を録ふ作と言〜使を流兄へ伴々る。宋江賢
の作り。兄くの跡ふ向く云我等多年の万程くの人紙せ〜弁事ひ此招安
うみくふ家の居となぐ。豊収ば〜うぐ〜人やとヤ々る。呉用先生云系信按ずふ

太尉陳宗善勅を奉て梁山泊小使す

ひ度の招安いかゝ成べうゝ然ば俄ひ招安して我寨の弟と許ゝとも。胡延へ
面部するの後い必ず我寨と寨花間前よ無靈べし。僥倖と敷し大軍と
引来べし。時孫器を徒して人るゝと切ゝ我梁山泊の威勢と弱し。後
ふ面部せば然我寨と教ひ徒ずべしとゞ言へる。宋江ゆて云汝のまかうう
ふ従べ我寨の義の二字を懐るべし。是をいうんぶせんと欲じ。林冲が云
胡延より来る者い必ず我寨と教とべし。宋猪が云伯書の中
女しふて。我らを欺負の様あゝべ我死をとも他人まゞ。徐寧が云胡延
より来るの使い必ず高唐州の人なるべし。なゞ彼を争論
て止ざるべし。宋江集つゝ云。汝が寨徒ゝ結ふとかうゝと和使と
迎るの准備をなすべしとて宋清曹正丈人とゝゝ遣彦成
徒備しめ寨をとゝゝ堂上を下ふ徒の慢募を張しめ。尾上ふ

い絹子段子などふて作うる花なゞと絹十分齊整とぞ云ゝ。又
其用とゝゝ。ゝの指合となるゝめ。裝宣蕭嘉呂方郭盛の四人
ふ命じ梁山泊より二十餘里の外ふ来ゝ。孫立耐を迎ひめう去
徒ふ孫立耐い張幹辯李虞候と共ふ。白馬ふ乗ゝ従人三
百餘人并海路より付る軍皮数十箱い前ふ多んゞ葉肉酒
風擔の内ふ十瓶の御酒を載せ箱るの皮人い和書の名と背ひ。海
路の宰子ふ六十人前後を取囲み梁山泊を左ゝ。左右ゝ
中ふ冨貴あゝんとと就ひ行る。蕭嘉裝宣呂方郭盛の四人い宋江
の命と就ゝ徒ふ。面三人の僕従とつれ。分ういおしの刀剣の類と帯び。
吳酒菓子の類と以くま活ゝて行る。三時孫立耐京人の出るゝと
ゝ地ふ俯して三拜し張幹辯云彼宋江准の勢

ふ托〜て。自〜来く勅使を迎へざる。汝の罪殆死すべきの械人く幸ひふ今朝廷の招安を請なず〜。此のぞく礼を知〜ざるや。請を尉に処らはゆりえべ〜とはりれば。蕭嵩雲宣呂方。郭盛の四人い一度ふ死を拒ふつけ頻ふ罪を請く云。自来天子よりの御沼一度も梁山泊へ来ることなく〜。これふ因くして度とても。歩ぐまを知〜ざるふ伯く系らに人をま係ふ者〜。宋江い大小の死刑とともふ知く金沙灘かてれ結ひ迎へひる。を尉何年雷霆の怒りを止め残命の罪を洗〜。国家の為ふ好事を成就なるべ〜と知ひ。掌虞候請より杖も罵く止ざりれば呂方郭盛い怒りる。刑を宣〜くこへりれば蕭嵩雲宣い是を制〜。一向ふ死を請。菓酒を以く陳を尉ふ奉りれども。さ〜ふんやりさへせるば只得ぬくの賓人を集内〜て。梁山泊の水辺ふ到りれ

り。去程ふ梁山泊ふ帰くより三艘の船を擺出。一艘ふそれる蕭嵩ふ呂人を渡〜。一艘い陳を尉ふ人を渡〜。今一艘い宋江と呂方ふ人を迎へりる。ひ船を漕るふ法闌程波小七。其時波小七い船端ふ坐〜。二十挺人の水手を〜。各腰刀を帯〜ぬ。船を掉〜て灘辺ふ到り。陳を尉を招め張幹辰李虞候及び呂人侯人を迎へ軍書并ふ御酒を船上ふ積り。其外一船をもなき請ふ人ふこへふりり。船く二十挺人の水子い船を水上ふ推出〜。各村歌を唱へりり。李虞候大ふ罵く云。村驢ぞ礼こ。朝廷の使人ふ左様ぞと制〜れども。許多の水子ふ由ふ村歌を唱へりれば。李虞候ることなく。迎言ふも及ばぞ〜て。彩もるるふ村歌を唱へりれば。李虞候いよふ怒の顔を知く。許多の水子と接面よりおりれ水子い船ふ乗なく。其なく言へと云。我らの歌を唱ふかい。汝ふ知るとふあるべ。皆一度ふ云け

れば。李虞候大ふ怒う罵く云汝ら繞紙まさふ死すべし。いうんぞ我ふ向く恩とをするやいで拘こんとと立うれば。両方ふ垂帳うる水ふへ。喝くと大ふ笑ひ。皆水中へぞ花入りる。阮小七船阮より大ふ呼く云汝ら皮ゝ。我水ふを皆ふ中へ歩入るゝ。いでしく此船を搖ゆふやと云うれば。活船の人くい船と息をこん合せ。皆ふ花言いかうりる。かゝる処へ漂流より二艘の子船押来る。東京阮小七い針を投げ。船先より船の艙ふ立をあけ。太揖ゆく借を延垂ば二艘の幕船の朱ろを待てとをなうんと係りしぐ。時二艘の鉄船をこうけ。嗚地太揖を援うれば。や船ふ乗より水湧揚う船中忽ちふ一二丈程も沸れば船中の船動斜なるば上を下へと投ゝう。阮小七大ふ呼く云。船漏うとも。凡人驚ゝこうへ入ゝ。ひふ幕船あれり。柔後ゝうへべ

と叫ゝう。陳ふ尉ふ凡人い船拘も捜あへば。御酒勅書を拾ふ垂命ゆうく助ゝう。皆彼船へ移ゝう。全船へと移ゝう。去程ふ阮小七を陳ふ尉の船已ふ遠ざうをこゝ。揖子を以く船底の孔を塞ぎあいづの口垂を吹れば。二十餘人の水ふ急く小船より机より。船中の水を留捨ゝう。阮小七ふ水ふを吸ぐ先一瓶の御酒を船来しあ。まゝ封を開くふ酒香彩りふ薫ひゝれば。盡とも求ば一欲しゝ。ゝ。

ゝ。ゝ。ゝ。

紅を搖〳〵め。孫立尉の紅ふ遥云〻。金沙灘へ付ふろ。此時宋江い点の張紙とは〻〻〻者ふむ〻。書を燒焼を點〻。金を爲〻數を擬書来と書〻。孫立尉を者の上ふ書せ。酒及び沼出を一ツの皁子のとき亟〻。ひ人を〻〻〻搖〻め。宋江ふ点人張を低〻ねく〻〻。宋江ふ〻〻〻罷〻云。文面の小吏羅を紅〻。遁る〻知なく。等くも其人と〻〻。こふむら〻むふ逃接待ふ為るべきの而。延引〻〻〻失礼せり。伏〻〻〻望らく〻〻罷を云〻〻〻べ〻。李虞候ふ云。孫立尉ふ此朝廷の其皮自〻者く招安〻〻〻〻。捲〻〻〻〻

候へ尤の階ゑ坐しられば。梁山泊の方うは蕭嵩。路宣い右の階ゑ坐しふるる。時宋江梁山泊の頭領を呼聚るゑ。招合一百七人の因て唯李逵一人をえざりられば。又りや大事を仕出さんと。人をして四方を尋求めくらども。一向ゑ知れざれば。代時を羅ふるる。此時四月中旬ころの天象ことゑふ喧嘩なれば宋江を初め件多の頭領おく夾道の對袍を着し。階下ゑ坐して皆百官をとゝのへふるる。時陳宗善尉をづうう連の因より詔書を知せ。蕭嵩へ授しられば。蕭嵩袋宣詔ぐ僉れば。皆人おく海を。蕭嵩そうまく詔書を披

朕兼祖宗之大業。開日月之光輝。普天率土。罔不臣伏。近爲潯宋江等嘯聚山林。刼據郡邑。本欲用彰天討。誠恐勞我生民。今差太尉陳宗善前來招安。詔書到日。即將應有錢糧軍器馬匹船隻。目下納官。折毀巢穴。赴京原免本罪。倘或仍昧良心。違戾詔制。天兵一至。齠齔不留。故茲詔示。想宜知悉。

宣和三年孟夏四月　日　詔示

蕭嵩ゑ詔ふ読終られば。宋江を始め諸の頭領者怒くうんへふる。此ゑ忽ち一陣の霹靂のごく呼ぐ。是旋風李逵梁の上より飛下すぐゑ蕭嵩ぐくより詔書を奪取て。を傳取く沉を目がけて歩られば。宋江盧俊義立ちのく止しられ牲

李達
宋江明
陳大尉

黒旋風李逵怒て勅使及び附人等を怖しむ
盧俊義
李虞侯
呉用
張幹辦

お止まらざるべし。盧俊義自を横へく。知解なる。李虞候傳
よう唱へく云。這厮是伝の恥どを仮へ大膽なり。村漢とても人と
狂人まさふ死すべしと罵りなる。李逵い狂も人を殺すべく打しふ。李
虞候うかく悪口するを笑へく。李面よう歩来り。撒止へく云。汝は烏漢
持へ来るふ作が招書ぞ。張幹辦が云。これい是大宋皇帝の聖旨
なり。李逵が云。縦ひ皇帝ふもせよ。何よても此も微大なるべし男い
笑まず。汝の皇帝が名氏宋といとぐ。我哥分も名氏を宋とりて。今
一度は李逵ふ對へて偖大なるべ。先人招を書へ人を歩殺へ。絶
よ汝らを歩殺さんと罵へりなるべ。扁人招へ巻へ李逵を初め湖
堂へ拉逢去ふなる。彩へ宋江も尉ふ對へて云。李尉先案法へた
へべへ。必ず彼らが礼を免へ。

へへへ。皆恩彼ふ浴すべへとて。李逵を金の嵌眼へなる盃を紅
玉盤宣ふ命じへ一瓶の酒を酒舟の上へうたへ。ふけりなるふ。呉学義
の悪酒なりなれば。宋江再び盤宣をへへ九瓶の酒を飲へ酒海
へあけりなるふ。皆悪酒なりなれば。扁人大ふ驚き紀へへ怒りとなりふ
なる。かなる処ふ魯智深ふ狭徠を提げ。虎のごへ叫んぐ。堂ふ跑上
うなる。なる罵へ云。海娘撮島なるんぞ人を欺の忘へ。水酒と仮
へ呉酒となへ。我らを呪へんとへとて。おうれば。彩ふ跳へ赤
髯鬼劉唐。朴刀を横へ地上へる。彩去武松も双戒刀を横へれば。
没遮深穆弘。九紋龍史進を。一度ふ刀を動へく跑上り喊と吼と
飛へりなる。宋江い是呉半へなるべと推量へて。ふへても身を横へ人を
尉ど蒲島ふ下へへへく云。海へへ扁人おへふへても李尉を犯へ傷

るとなるに孫志尉を犯さんと思ひ家紀を殺し。李逵ふ怒も角も料へべし。と雲夢ふ帰りられば宋江も思祚ふ等紀好漢も おく招くこうられば宋紀ふ宴さ僕従として孫志尉を轎ふ乗せ。盧俊義とせふるふ主人を護衛しく金沙灘ふ送りる。初く宋紀ふるようりて紀を捉ふ病し。孫志尉ふ向て恭しく云る。我等京兆府ふ住もるふんなる紀ふあらべ。やの せん胡延の美人我が梁山泊ふ来れば人の云と知りらべ。撮りふ持威と紀く脂ち人とぶと紀く鼎人さふ怪べ紀くふ再び紙書を作し。若云と紀く招恤うる。我等京兆を去しふ帰べ。縦ひ死すとも恨もの一人もられなし。志尉胡延ふ向て宜しくお執威を執まるとく。ふ船を紀く渡し。孫志尉鼎人幸を命を切り。ようく渡品とさしく去よる。紀く宋紀ふ再び志義堂ふ帰り。弟多の紀紀を集めて云。此胡延紙書の趣を紀く明なるべとこども汝ら鼎人も又多く紀く不敬こいんがしく胡延の美人を殺るしやうやとこりられば鼎人名自ら苦ふなりり。其用ゞ云。大哥必ど怒りを使うべし。胡延の紙書を紀く拝大なり。人と紀く人と世べ鼎紀の怒ふいむなるべし。只はよいもふ令を下し武ふるを准し。水軍を教へ軍船を用ふどんる。出要なり。追分策必ど天子ふ奏して大軍を引率べし。時いふ生ふしく計を紀く彼ゞ家るを切らし。汴甲も捨べ義ふを戦梁山泊ふ撃ん行ふ時ふ小ふしく招安せべ。李成敗すべし。哥々憂へうふとなるんと。程の嵩紀を宣られば宋

江を始めとして法師外も皆〻むことを。そ日はみな弥〻ゆりくり。
扨張を尉い幸き命を仰り。兄人を呂連海に〻沈四り。ゑぐを
守張叔夜ふ見へ梁山泊の賊人型を違ふ〻紹を拉彼弃た
るゆ。そ〻ふ兄雖のゆを妻細ふ告りゆふ張叔夜が云。小生宣神を
尉梁山泊へ行ゆふ時より。たことを存じたれ。賊ふを尉ふもんカを費し。
別〻〻に疲労もあるんゆ。今夜は休息しうひ明日ふく発皆
し為ざ汶ゆ水の上夫雲ゆて紙ゆべ〻と宣りれば。を尉も外義し。張
叔夜ふ辞し。旋鈴ふ囲りゆふ。を身を辞鈴へ又廻の〻ゆ。
徒し〻〻云ゆるん。そ〻ゆるゆ人の附人を尚而へ結し〻ゆ〻〻とゆせ
ゆど。を尉い禁家。ゆ家の云をとうひ。彼ゆ人も立紙の辞を〻〻紙
ても在ゆ〻と存じ。そ〻ふゆ。梁山泊の次第ゆ〻ん幸い

を前すぞふ眼前ふ見ゆるごゆ。そ〻宋江兄弟下の去ゆ方丈
不歇の豪傑ゆを威勢を紙〻〻拉〻ゆんとゆべ。却〻紙を招く者。
芸を朝廷より良将を撰〻〻向ゆ〻。ゆ〻後ゆ。そ〻面を後毎ふ
生捕ゆ歇の威を汚るのを。そ〻軍士の討死いくゆを〻〻紙後
とても征伐せんふ。とても在ゆざんべ。後〻〻天下の人武戦死〻を
ずんば。云を止ゆる紙ゆあるべ〻〻唯を特なるゆ。彼紙を図んを
天子ふ云ゆを存ずる処。威ゆゆ威ゆゆ招ゆの紙ゆ天子
の幸福天下万民の安ゆなれば。紙人の美味ふゆ〻〻のをゆ。
勅ゆ中せ〻安人ゆ程ふ明ゆなる良将と云べ〻。天子ゆ周の武
王のごく。たゆの居下ゆ周公旦を云王のごくなる〻べ。軍を向〻〻梁山
泊を掃清ゆんゆ幸月を待べ〻〻ゆ世ゆあ〻べ宋江ふ兄を集

るとも必ずしも今の招安に盗賊を襲撃するに仰られども時世と
倩め拾ひを仰へに亦理の為而今度彼らを礼を怒らず天下の勢
を奮て攻うとも勝ち捨てとなり軍士に数万をびくとも敵の勢
を加へんを眼前に明らかなり上に栄主なく下に関白なし
行方の勢を以て向へ梁山泊の英雄を進人と思ふ者あるべし
て大勝する事疑ひ女大勝なるべき生捕となり加撃を蒙るのこと天子
の御威光を失ひ一の孫計もなく彼に勝んとすれば己が家郷の往
ず十分一の孫計もなく彼に勝んとすれば己が家郷の往
ず勇力の往も尽くして帝主へ出勅に合人処にさるに新ぐる族
多くんばなり情ふ古尉の宮の人を費しりひ此上又来日に天
下の士民いくばく死亡せんと欲ても勝ちあるべき理を細ふ述け

れば孫古尉も弱腰に成ふ朝に奏聞し後を
日に絶ぐ来る所梁山泊の勅諚を逐
一行れば孫古尉哭く大に怒て云賊人を礼を見て大家の
怒らるる眼前に彼を捨られるやと思られば孫古尉
泣く云ふ是古尉の罪大ひなるに成ぬ小生此身を貴
碑うと今幸ひに幸と命を伸く降ひと申る哭蔡古尉
徒所に童徳寺古尉揚古尉の方へ使を以て遣じられば童
揚の三男人来られば白虎堂の奥殿に集せり時蔡
古尉に孫幹雑事虞候の者人と呼ぶ梁山泊の賊人勅使を罵
り詔書を破り捨ることを待ふ後に揚古尉が云賊人ホこと
礼なり速に天子に勅めく招安をせらるべき作なり中と問ふ

りて。宮を尉ぐ。我ら日朝廷に奉仕して。今宵招安に入らんまで。死物と
と。君高儀に。こたり。童樞密に。恩人に梁山泊の賊徒に。皆是鼠
竊狗盜の輩。みな〳〵忠義に。ふるひ。區〳〵たる小女一支の軍を引。
日を宮に発足し。賊徒を攻てび〳〵。永く禍を掃へべ〳〵と宣たり
ける。所人も也こと同じ。こして。翌日天子へ奏聞を遂て発足の日を
定むべ〳〵と。高儀已に宮をりられば。その日に君臣辞〳〵て。ひたすら去て
ふ。翌朝天子。宸殿に出御あて。朝政半を聴ふ。高俅の礼畢て
皆第幕を奏〳〵る。時幕を作て出。梁山泊の賊徒を招撫り
る事を奏〳〵ければ。天子宮〳〵く。逆縛を羅に問く給ふ。神
朕に招安のことを勅めしに。何者あるべ〳〵。俅給半中奏
して云。招安を主張して勅め奉る。御史大夫崔靖そこ

といひ〳〵と。言へりれば。天子俅の即崔靖を召出〳〵。皮を脱て大理寺の
皮人に命じ。罪を糺ら仍りて〳〵められ。天子再び幕に向
て宣ふ。梁山泊の賊害をなすこと年久〳〵。何の人を遣て攻
べきや。幕に言へ〳〵。大軍を半〳〵。統領を十に分て差
に揚る徒人まで。呂信義を以て攻べ。按ずるに梁山泊の賊人
に命じ。親〳〵大軍を引しめ。統領を以て攻べ遣て
と奏〳〵る。天子樞密院童貫に問〳〵。汝朕が為に大軍を引
梁山泊の賊冠を退治べきやと宣ひれば。童貫へ勅言〳〵る。
古人も既に憎ることあり。ことに孝を尊〳〵。呂とかりくいたと
謁べ〳〵と。呂新に大るの骨を顧ずして。至のみに猶の愛
を深〳〵と。揚戰る体も侍よう。童貫こて賊冠を退治べき

人なりと。推薦せしに。天子随即童貫を喚して統軍大元帥の職を授け。金印を賜ひ。諸路の兵を集め軍を進めんと。日を擇ぶ。梁山泊を剿捕せんとす。童貫は疑得と外堂にて。侍郎を招き。枢密院に入り。事を計議と。分撥して。京の八ヶ所の各下の八ヶ所の各一ヶ所を守ふ命じ。名一ヶ所より。一人の良将を。一万の軍を。京の当獲中軍の内より。二万の精兵を擇こ。枢密院中の裏有半勢力。仮ふ所の如く。支配させ。又天子の御ふ勢の中より。二人の良将を選ばれ右翼となし。号令已ふ定まる。法半の完くなるを待て不日ふ発するをべしと。計り。彼八ヶ所の軍馬は。雕弓の去る。故皆段鵬挙。鄭天の去る故皆陳翠。楽天の去る故皆呉

桑。居天の去る故皆韓天麟。許天の去る故皆李明。劉天の去る故皆王義。洪天の去る故皆張清。常天の去る故皆周信なり。又天子の御威勢の内より。揀出せる二人の良将。左翼の即けとなる。所前の龍大将鄭天。虎大将畢清なり。各四方の軍馬を。各地集りなれば。童貫自ら元帥となり。中軍を掌握して。三軍ふ下地をなし。各勢故合十万餘騎と唱えいる。童貫は武庫を発して。軍資を出し。幷ふ許多の去獅を持て三軍ふ分ち。吉日を擇て軍を出さんとす。侍いる。偖楊戩の二を尉い酒食を以て。童貫が軍を賞しいう。

○呉加亮四半ふ方旗を布

去程ふ已ふ吉日となれば。童貫は十万餘の軍を引連て天

新編水滸畫傳卷之六十一
十七
高俅

樞密院童貫十万の兵を引く
梁山泊を征す
新編水滸畫傳卷之六十一
十八

子ゐ輝〳〵るゐ歩系彩曹門を出。梁山泊へ急発ひ已ゐ十里の彼
往をること向と望こるゐ。人る戰〳〵こえれが何人なるや人
を以く問しめるべ。高俅揚戩の二大尉軍と錢別〳〵こえうと
若へこう。童貫いこで馬より下こて。訳結ゐ入ぬべ。揚二尉も
程なく入来る。俅盞を挑て。童貫ゐ勧めく云。樞密相云ひ彦
梁山泊へ赴きうで。必大功を立うべ〳〵何とぞ早く凱歌を奏〳〵
ゆりうめべし。梁山泊の絨人りて水を渡ゐ投て。敵を迎るの計較
となるべ。此度いこで四方を囲んで。狼牙の陣命を迎て味方の陣
ゐ堅固こう。故と徒引山と下し。而〳〵て後云と引く攻討ぶ。
一人も逃ぶべ切を〳〵て永く禍の根を拂ひうべし。然らば君
が功勲もおあるべ必ぶ吉左右を笑〳〵めうべ〳〵と宣ら

れれべ。童貫も雖得君が厚云と云るまぶとて盃酒を飲つ
く〳〵れべ。揚戩も又盃を受めく云。樞相云君ゐ之来言葉と後
ゐ。源く告云の計ゐ違ぶうゐ人なれが。這等の絨人を攻亡した
ゐ之。嘗を迎〳〵こう安うべ。俗とゐども被梁山泊を水
迎ゐ拠く不便の地利なれば必ぶ良計となるうゐと盃を受あ
〳〵べ。童貫ゐ和〳〵とて飲く盃酒を飲。主て高俅揚戩ゐ
向く云。二告尉必ぶ業ぶうゐとなれ。小官不肖なりとゐ。わ
く軍の指度を知れば彼地ゐ和ゐ。機ゐ強く変ゐ応ぶ。一人も生
さべ。ゐ知べ〳〵と。ゐ遊ぶ宮れ。ゐれれば高俅揚戩も敬ゐ。
幕三酒会を設め。延摩已ゐ終れば。童貫ゐ辞りして来城ゐ
ゆれり。彩く童貫いるゐ歩系と云れれば。大小の女人

八狩も數十里のあなまで送り給ひ給へ帰り給へ童貫
三軍ふ下知して云るを九隊となし〜を発して統合を勢十万餘
諸藝を摂金を落し錦帆の林のごとく囲んで押通れば天
地も崩るゝごとくにして衆枝ことえおり去るどふ朱家を歩
立てより已ふ二三日をもて流れの地へ来れば告げ張叔夜い
来るより男を出て迎へ入り童貫大軍を流れの橋下ふ屯し
来れば徳の従人を召集て張叔夜が鎗ふ刺れば張叔夜を
来ぐ童貫と言上ふ迎へ已ふ茶も流れば悪なきを賀し
入るふ童貫ぐ云流も知る通り梁山泊の強盗先年より良民を
殺害し財宝を強奪せしめ旅人を劫て金銀小ろ〜び朝廷よりも
度〜軍るをさし向て征伐といへども力微ふ智おくして遂ふ功

を立ることなく却て賊人の勢を猛蔓せしむ此を人を以ざるを以て
なり我此度び勅命を受り百人の良将十万の大軍を以て梁山
泊を討亡し民の賊人を捕て民を安んじ天恩ふ報ずべしと演
ら〜張叔夜言〜云梁山泊の智深鬼神をも挫ざるべしさ
とな〜賊梁山泊の賊寇ふ拠て常ふ云馬
を調練せり況や中智深勇烈の人多れば必ず小覷るべら
ら〜一旦怒深の友ふ恒〜云を〜あるべ〜唯出征と良策を廻ら〜大切を立るべ〜と悩る処な
く中れば童貫曰あへど大ふ怒りて云汝らのと懦弱なる匹夫つ
ぐ云を怒れ敵を避生を貪て死を恐るより賊の勢を養て
国家の大事を失へり是不忠不義と云べし我今ふ到て何

の恐るゝとあゝんやと云ふ罵りつゝれば張叔夜もん中ふ童樞密
後好不智なりと知るゝ再び辭なく先酒食を饗ふ童貫ハふ甘り
已ふ酒宴半ばに童貫い張叔夜ふ辭し懇ふ如大軍を引率
し梁山泊の辺の廣地ふ陣をとりり張叔夜怪く童
貫ふ論ずを遂りゆゝ信思ふ童貫ゞ宮子將の宮ふ命ぜ
武段の軍ふ莫去の軍士の命を為さんと痛ましいうあと歎息し
て止ざりり扨又梁山泊ふ先鋒ぐるゝ細作の者立ゆりて此度童
貫十万の軍馬を引率し攻来ると迫をありられば寨ふ集ふ其用
と高議し計を定めゝ評議の所ふ告知せり軍令ふ
遵背する者あらば罪科ふ處すべし と嚴ふ命じられ所ふ散ゆ
く扨義し皆利益して扨後夜も明られば童貫ハ

軍ふ下知をなし宿擂をなしふりり人雎州の云る加監將李
をゝ先陣大将軍とし鄭州の云馬加監孫翁を副先陣大将
軍となし孫及の加監呉秉彝ふ
合後となし虞州の加監韓天麟鄧及の加監王義者人を我左
の方を衛しめ鄭及の加監馬万里嵩及の加監周信者人を我右
の方を衛しめ張統大将都呉虎大将軍猪者人をして中
軍の将軍とし童貫自ら元帥とし十万餘の軍士を
し自ら金鼓の號を為し名馬ふ乘り紅齊をなし時ハ
軍已ふ利益ひられば童貫張軍ふ下知し鼓を打徒を鳴し
梁山泊へと進発ス張軍い已ふ八里ばりの所を西く向の方を進
けるふ急ち金鼓天ふ響きて一族の軍る麾を振ゝ地まる

や敵軍あらんとて。近よりられず。凡三十餘人各々手に手に絶
を長く。ひかふ。其中を戴きたる上に纏ふ繩ふく織たる纓ふ。金張の
紐を繋ぎたるふ弓箭或い戈槍ふを提く。各口笛を吹く。絶向ふ。其
中のうふ。ふたる大ねい梁山泊の英雄巡哨。孔外没羽箭張清。
其の前ふ拍へたる大ねいはぐく鎧旺く。右の方ふ拍へたる大ねい。
く丁得孫。其時三ねい三十餘の軍なるを引ふ。己ふ童貫ぶ軍
前ふ立く。各口笛を吹引て退きたる。童貫ぶ先陣の大
ねい。姻婚蓋。陳翁。人いまだ大ねの指令を受られい。自ら恐ふ退
付ぶ。中軍へ報ぶられば。童貫まく陳希ふ出て至
られば。張清再びるを引く。童貫ぶる前へ出て至る。童貫
噪く人を。と繋ぐんと欲ぐられば。左右の良ねい孫く云ひ人と

て吉ふ吹くたる。孫の名人梁山泊の張清ふていあり。彼るの鞍ふ
繋る綿の袋の中ふ多く小石を待へ敵と戦く。投る時い百発
百中。多くの人命を破れり。必ず彼ぶ奸計ふ陥うんまぐと宜
られば。童貫もむと同ぶ。休ふけり。玄程ふ張清い童貫ぶ
陳希ふ。三度まで口笛を吹く敵を携ひられども。童貫ぶ分
より高を。ためぐられば。引返く去ぐ。童貫ぶ軍去い
又三里ぐらも。迫る処ふ忽ち向ふの山の方ふ。旗の音。
てぶくもふ百餘人の軍去歩ぶ立て。地出る。南北の四人い梁
山泊の歩軍。沢外黒旋風李逵。混世魔王樊瑞。八臂那吒項
充。飛天大聖李袞。其時ねい百餘の歩去と引つれ。山の
坡の下ふ陣を張られば。童貫もは向ふ嘯く向ふ陣を張ふ

を作りけり。此時童貫るよりおて多ふ五蠱尾を紅ト知〜て云く
早く梁山泊の賊徒を打ちべし〜と唱りれば大勢の軍兵一度ふ
吐と切りけ。李逵樊瑞もあべ〜支て走るゐ勿ち味方の軍
云と二手となり。名ゐふ鼎鑊を持て山路をそ〜く近附る。童
貫ゞ軍勢い揚ふ来て又古里ゞ引も退けり〜ふ。勿ち平川廣場
の地ふ知りれば留るを止めて孫を紅扇の人と〜く梁山泊の
軍兵を迎へ〜めりふ。李逵樊瑞い山を降り林と走く。宋江ゞ
去ふりり。其時童貫い中軍ふるを招へ。士卒ふ下知〜て木を攢
て作りる拒馬を立く。二人の法安と〜く拒馬ふ出ら〜め。玉
蠱尾と紅く花の方へ招けば拒馬勿ち花の方ふ脚花の方へ
招けば。勿ち右の方へ脚を上と指べ。勿ち起く天ふ飛く下と

指とべ。勿ち倒く地ふ伏〜。是と名ゞ四門斗底の陣と云く。時
ふ法勢已ふ完れば。童貫い梁山泊ふ攻上ゞんと後〜る処ふ勿
ち四人の山ふ砲の音天ふ響きて後の山より一隊の敵軍北の童
貫ゞ右ふ下知〜て。急ぎ防へとなりけり。自〜拒馬ふ出り進ふ来
りけ。山東一路の敵軍湖の海赤る如く尚先ゞの一軍い左く紅の旗と
立。第二軍ハ左く雜線の旗と建。第三軍ハ青き旗と立。第四軍ハ又
白雜線の旗と立。第五軍ハ黑く雜線の旗と立。第六軍ハ又雜線の
旗と立。第七軍ハ左く皂の旗と立。後の方ハ左く黃なる旗と立。名孫
勝ゞ紅たる敷密ふこゝふ居り。又中軍ハ火烟紅の旗と〜〜建。名
赤き燈ふ赤き塊と名〜。赤き馬ふ打乘て中央ふ赤ゞの引軍旗

と建てさせんぐ純白の童子い狐も瞪と笑めくかの引軍旗を
屋こうんふ上面ふ金のもう箔ふて面斗ふ星を画き下の方ふ
象嵌の繍あり。忽ち旋と言しく。かの引軍旗ふ搖きけ
れば一人の大将出ふ馬を純出ふ赤色の盛と戴き。分ふ
八猩く袍と云しく。ふ狼牙棍と紅れり。背後の號旗の上ふ写て
云ぜん豫大将霹靂火秦明と。左の方ふ扣くる副将い。霊水将軍
單廷珪。右の方ふ扣くる副将い。神火将軍魏定国。三将めい
先いふ云差とうう赤るふ步系陳前ふ立ちうる。又東
山の方より来る軍勢い名書き盛ふ書き澄と云しく。ひとく
並び。書き馬ふ步系前ふ一車の書文の引軍旗と建て上面ふ
金のもう箔ふて東斗ふ星を画き下ふ書純の繍あり。忽ち旋

の言しく。引軍旗搖く処。一人の大将出ふ馬を純出ふ。紅ふ藍
擬色の盛と戴き。分ふ翡翠軍袍と云しく。ふ書竜の偃月刀と
持背後の旗ふ〳〵の上ふ写て云。左軍大将大力関勝と。左の方ふ
扣くる副将い。醜彩馬宣賛。右の方ふ扣くる副将い。井木犴郝思文。
三将名ふ云差と紅書きるふ步系陳前ふ立ちうる。又西
山の方より来る軍勢い名白き盛ふ白き澄と云しく。白馬ふ步系白い
又この引軍旗と建て上面ふ金箔て西斗ふ星を画き下ふ白虎の繍あ。
かの引軍旗の搖く処ふ一人の大将出ふ馬を純出ふ紅ふ色の盛
と戴き分ふ素羅袍と云しく。ふ緑絨絨と搖う。背後の號旗の
上ふ写しく云。右軍大将豹子頭林冲と。左の方ふ扣くる副将い花三
山黄信。右の方ふ扣くる副将い病尉遲孫立。三人の大将名ふ云

義と知る。白るゝを步繁孫新ゝ立ゝ後ゝ續き一族の人るあり。名
易き盛易き燈と云ゝ。つゝきるゝゝ步繁ゝ。黑色の引軍旗と立上面
ゝ金の十ゝ箔ゝて。北斗七星を畫きゝ下ゝ玄武の繡ありかの引軍旗搖く
処一人の大將出ゝるゝと。北出ゝ黑漆の盛と裁きゝ身ゝ皂羅袍を云
し。ゝゝ烏紗帽と搖ゝ。背後の號旗ゝ寫ゝして云合後大將雙鞭將
呼延灼と左の方の副將ゝ百猪將韓滔なり。右の方の副將ゝ天目將彭
玘なり。三人の大將名ゝ名ゝ云義と搖げ。ゝるゝゝ步繁ゝ立ゝ色い
ゝも嚴肅ゝ。義なり。宋江が孫武安字と合錢糧方ゝ立ていゝ表ゝ作ゝ

新編水滸畫傳卷之六拾壹終